

## マーティン・ワイトの歴史叙述：

『パワー・ポリティクス』と書評「ヒンズリー『権力と平和の模索』」を手がかりに

荻谷 千尋

2024-05-11

### Warning

このページおよびこのページにある資料は、5月12日に削除します  
未定稿につき引用、再配布はご遠慮下さい

### Note

ダウンロード：論文 / レジюме / 投影資料

## I. 問題の所在と限定

- 報告者
  - 専門：政治思想史；国際政治思想史
  - 主対象：エドマンド・バーク
- 目的：マーティン・ワイト（1913-1972）の歴史叙述の特徴は何か
- 問題背景：歴史的アプローチと社会科学的アプローチの対立のなかで見失われている、英国学派の個性、ワイトの個性の発掘
- 近年の重要な研究成果
  1. **Journal of International Political Theory**: 特集号「解釈主義と国際関係の英国学派」
    - 編者：マーク・ビーヴァーとイアン・ホール（2020年）
  2. ワイト著作集（2021-2023年）
    - デイビッド・ヨスト編（オックスフォード大学出版会）

## II. 特集号「解釈主義と国際関係の英国学派」

### 1. 特集号の趣旨

英国学派はその魅力を広く伝えることに苦しみ、他の学派と区別することが困難な論題やアプローチに焦点を合わせてしまっている。同時に、英国学派は新たな研究の道を切り開く可能性のある他分野や他学派との結びつきを十分に活用することもできていない（Bevir and Hall (2020a)）。

Cf. 「新世代の英国学派の研究と構成主義のあいだの境界線がますます曖昧に」（Zhu (2024)）

- 原因
  1. 英国学派に混在する二つの系譜
    - 解釈主義と構造主義
  2. 解釈主義に沿って国家間関係を論じる者の減少
- 解釈主義
  - 人間の行動は、世界がどのように機能しているか、また、その目的を達成するために何を為すべきかについての信念、概念、理論の集合として緩やかに理解しているものに依拠
  - 制度に対する人びとの信念 > 制度や構造

国家間関係に携わるアクターの信念と、その間主観的な合意や争いから生じる実践に、ある程度なりとも焦点を当てている（Bevir and Hall (2020a)）。
  - ➡ 英国学派のなかでもH. バターフィールド（1900-1979）とワイトに濃厚に見られる特徴

- ビーヴァーとホールの提案
  - 英国学派は「個人や制度の外形的な特徴ではなく、行為者の行動の**意味**を決定づけるものに焦点を合わせるべき」

## 2. 解釈主義におけるワイト：「気乗りのしない」モダニスト

- 同時代的コンテキスト：第一次世界大戦の衝撃
  1. 発展的歴史主義への疑義
  2. 社会科学の台頭
- ➡ バターフィールドとワイトは発展的歴史主義と社会科学の双方の受け入れを拒否
- ➡ 「気乗りのしない (reluctant) モダニズム」
 

彼らは二人とも進歩主義の本質を嫌い、その叙述がしばしば道徳主義的であることに苦言を呈した。彼らは、ナショナリズムに対する進歩主義の手ぬるい扱い、国民国家こそが自由を実現するための最良の手段であるという思い込みを非難した。しかし彼らは、モダニストの社会科学が望ましいとは考えなかった。彼らは、概して、社会科学が暗黙裏に進歩主義的であることを懸念し、また、社会科学があまりに狭義の功利主義だと主張した(Bevir and Hall (2020b))。
- ワイトの歴史哲学
  - キリスト教信仰から進歩主義を拒否
  - バターフィールドの中立的な歴史叙述を拒否
  - B・クロウチェ (1866-1952) と R. G. コリングウッド (1889-1943) の解釈主義に立脚
  - ➡ 発展的な歴史主義を拒むワイトの歴史的アプローチを支える歴史哲学、理論的一貫性の基礎は何か

## III. ワイトの歴史哲学と『パワー・ポリティクス』

### 1. 歴史哲学

- 「歴史と国際関係研究」 (History and the Study of International Relations, 1954-1956.c)
  - ワイトの問題意識
    - 歴史上の出来事は固有な事象として叙述すべきか、それとも、出来事のあいだを類推するような一般性を備えているのか
    - 国際政治のように、プレイヤーが少なく、また、類似の出来事が少ないが、世界に与える影響力が甚大である場合に、歴史叙述はどうあるべきか
  - R. G. コリングウッドの『歴史の観念』 (1946年) からの示唆

私たちは「歴史」という言葉を、過去の実際の出来事という意味と、それを歴史家が再構成した物語という意味の、2つの意味で用いている。しかし、過去に実際に起こった出来事は、私たちの目に触れることはない。歴史家が再構成したもののなかにしか存在しないのである (Wight (2023a))。

歴史上の出来事のあいだの類似性は、天界上に蓄えられている、あるパターンに適合するから生じるのではなく、歴史家の心のパターンに適合することから生じるのだろう。もしそうだとすれば、一般化のプロセスは循環するプロセスである。過去の出来事を、他の過去の出来事から導き出されたパターンに適合するように再構成し、その適合性そのものから一般化を読み取るのである (Wight (2023a))。

- ➡ 「概念枠組み」「パターン」「一般化」
- ➡ 「国際関係学が試みているような、より謙虚で、より小規模で、より大げさでない意味での抽象化」であれば、許容できる

私たちが考慮する必要があるのは、出来事を類推し、現在を過去から、過去を現在から見ることに適切かどうかは別として、人びとがそうしているという事実、そして政治家や官僚が現

在と過去のあいだに描く類推が、彼らの決断に入る要因のひとつであり、それゆえに未来を決定する要因の半分を占めているという事実である（Wight (2023a)）。

- ➡ 当事者の認識の重要性
  - 過去との類推により変わる未来

## 2. 『パワー・ポリティクス』の動態史観

- 『パワー・ポリティクス』（初版、1946年）
- 『パワー・ポリティクス』（ブルら編、1978年）の構成
  1. 国際政治のプレイヤーである国家を論じた1章から6章
    - 支配的国家、大国、中小国家など
  2. 国際政治の環境の特性を論じた7章から10章
    - 国際革命、国際的アナキー、国際社会など
  3. 国家間の関係にかかわる11章から18章
    - 外交、同盟、戦争など
  4. 国際的な協調の枠組みにかかわる19章から23章
    - 国際連盟、軍縮、軍備管理
  5. 結語24章
    - 「パワー・ポリティクスを超えて」
- 国際関係史の動態的パターン
  - 支配的国家 vs 反支配的国家連合

国際関係史でもっとも人目を引く主題は、国際主義（internationalism）の発展ではない。国家体系（states-system）の支配力を手にしようとして、ある国家から別の国家へと連綿と続く、奮闘努力の連続こそ、人目を引いてきた。それ以外の国家の大多数が連合（coalition）し、消耗を強いる大戦という犠牲を払ってようやく、支配力を手にした国家の奮闘努力を打ち負かすことができた（Wight (1995)）。
- ➡ 一見、標準的な「栄枯盛衰」の近代史に読める
  - Cf. 同時代の歴史書：ヒンズリーの発展的歴史主義
- 言説への着目（ソフトパワー）
  1. 支配的国家の言説
    - 国際的な統合、連帯構想を訴える
      - ヘンリー5世：再結合したキリスト教世界によるトルコへの聖戦
  2. 反支配的国家連合の言説
    - 自由と独立に訴える / 力の均衡を原則とする
      - 「ヨーロッパの自由」と「海洋の自由」

## IV. 書評「平和は自ずと実現するか：ヒンズリー『権力と平和の模索』

### 1. ヒンズリー『権力と平和の模索』（1963年）

- F. H. ヒンズリー（1918–1998）
  - ケンブリッジ大学国際関係史教授（1969年-）
- ヒンズリー『権力と平和の模索』
  - 近代ヨーロッパの国際協調主義の通史
    - 第1部：国際協調主義者（internationalist）の理論史
      - 主権国家が確立し、国際法が国家間の法としての意味を確立したのが18世紀中葉であることを明らかに

- ルソー、カント、ジェームズ・ミルらの国際協調理論を検討
- キーパーソン：カント（『永遠の平和のために』1795年）
  - 「世界連邦」提唱者という誤解（federationの誤読に伴う）
  - Cf. 高坂（1964）

カントは、国家間に存在するディレンマの解決策として「法の支配」を置くことで満足しているのだが、それは、この問題をほかの手段で解決することはできないと考えていたからである。つまり、国家間問題の解決には「法の支配」的解決以外に道はないと彼が確信していたからなのである（Hinsley（1963））。

- 平和運動家つまり世論への着目
- 国家、政府関係者への記述ほとんどなし

## 2. 書評「平和は自ずと実現するか」（1963年）

- ワイト書評の題名：「平和は自ずと実現するか」（Does Peace Take Care of Itself?）
  - Cf. 高坂書評の題名：「いかなる国際機構が平和をもたらしうるか」
- 批判の中心：ヨーロッパ近代史が「平和が自ずと実現する」発展的歴史として叙述されている点

平和は自ずと実現されるだろう。この考え方によれば、近代社会の発展と集合的心理の発展には、戦争を封じ込め、廃れさせるという基本的な歴史的傾向がある。外交はこの傾向を促進することもある、遅らせることもある。カントはこの4つ目の議論の最大の支持者であり、ヒンズリー氏はその弟子である（Wight（2023b））。

平和の創造にかかわるカント的なデミウルゴス（世界の形成者）の双子は、世論の力を増大させ、用心深く対応力のある国家機構がもつ暴力手段に対する行政的統制を強化することである。（原文改行）しかし、この図式の根底には、対立する国家間の安定した均衡こそが政治の最終的な姿であるという前提がある。そして、権力を完全に独り占めし、均衡のとれた国家体系を統一へと向かわせる政治的法則の代わりに、政治的統一を不要にするような、文化的な近似性を高める法則を推論する。こうして、ロシアと西欧の社会はますます一つにまとまっていく（Wight（2023b））。

- ➡ ワイトの拒否
  - 「対立する国家間の安定した均衡こそが政治の最終的な姿であるという前提」をワイト、共有せず
  - 文化的接近による国際社会の収斂
- ➡ 国際社会の多様性は常に保たなければならない

## V. 結び

- ワイトの歴史叙述の特徴
  - 国際関係にかかわる自らの主張（ワイトの言葉を借りれば「概念枠組み」）が先にあり、後付けで歴史が召喚されているように読める点
- ワイトの挑戦の含意
  - 国家間関係にかかわる歴史はどのように叙述されるべきかという問い
  - 国際政治を探究しようとする者にとって、今なお、貴重な参照点

## 引用文献

- Bevir, M., Hall, I., 2020b. The english school and the classical approach: Between modernism and interpretivism. *Journal of International Political Theory* 16, (2), 153–170. <https://doi.org/10.1177/1755088219898883>
- Bevir, M., Hall, I., 2020a. Interpreting the english school: History, science and philosophy. *Journal of International Political Theory* 16, (2), 120–132. <https://doi.org/10.1177/1755088219898884>
- Hinsley, F.H., 1963. *Power and the pursuit of peace: Theory and practice in the history of relations between states*. Cambridge University Press, Cambridge.

- Wight, M., 2023a. History and the study of international relations, in: Yost, D.S. (Ed.), History and international relations. Oxford University Press, Oxford, pp. 41–49. <https://doi.org/10.1093/oso/9780192867476.003.0003>
- Wight, M., 2023b. Does peace take care of itself?, in: Yost, D.S. (Ed.), Foreign policy and security strategy. Oxford University Press, Oxford, pp. 79–85. <https://doi.org/10.1093/oso/9780192867889.003.0004>
- Wight, M., Bull, H., Holbraad, C. (Eds.), 1995. Power politics, Revised. ed. Continuum.
- Zhu, Y.Y., 2024. Review "international relations and political philosophy" (by martin wight). International Affairs 100, (1), 408–409. <https://doi.org/10.1093/ia/iad331>
- 高坂正堯., 1964. いかなる国際機構が平和をもたらしうるか : f. H. Hinsley, *power and pursuit of peace*, 1963. 法学論叢 74, (5), 124–136.